

惑いの午後

澤野久雄

惑いの午後

澤野久雄



新潮社版

惑いの午後

昭和三十九年一月六日 印刷
昭和三十九年一月十日 発行

定価 三六〇円

著者 沢野久雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一
振替東京八〇八番

印刷・塚田印刷株式会社
製本・神田加藤製本所

© H. Sawano 1964 Printed in Japan.

(乱丁・落丁本はお取替えいたします)

惑
い
の
午
後

都電を降りるとすぐ、櫛見千枝は腕時計をのぞいた。八時半に、なろうとしている。

——ああ、市場はもう閉まるわ。

するとこの辺りで、買物をして帰らなければならない。彼女は月島八丁目の角から、築地の方に向って歩き出した。街路燈の光をうけて、並木の柳は染め上げたような緑である。緑の枝が、なびいている。

——いい風だわ。

五月の末だというのに、二、三日、暑さがつづくと思つたら、昼間は七月の気温だったそうさ。しかし、夜ともなれば、大分涼しくなっているのではないか。

千枝は乾物屋で、鱈の干物を六枚包ませた。菓子屋の店先では、味付けの落花生を四百グラム買った。それから、何を買えばいいのか？ 舗道に立ち止って、向い側の店屋を見渡した。昔にくらべると、ずっと美しくなった表通りである。ネオンも多い。が、——どこかにやはり、場末の

匂いは残った。店と店とはさまれて、暗いしもた屋の多いせいでろうか、それとも風にひるがえる、暖簾の多いせいであらうか。店屋の間口が、どれもせまい。

寿司屋がある。中華料理店がある。そばやがある。いや、「やきとり」「もつやき」と書かれた、白い暖簾の屋台店も出ている。仕事の帰り、そんな屋台に首を突っこんで、怪しげな酒をおおる男たちが、この界限にはどれほどいることか。時には卑猥な唄声が、暖簾をなぶって流れ出していることもある。

——いいわ、もうこれだけにして置こう。
と、千枝は思った。

旅行先の夫がいつ帰るのか、正確には分らない。今夜かもしれない。明日かもしれない。下旬に帰るとは聞いているが、何日という予定はなかった。その日が決つても、知らせてよこすほど、気をつかう男ではない。だから、その人を迎える積りで買物をして、無駄にすることもないとはいえない。

——今夜帰つて来たら、明日、御馳走するわ。

そう呟いて、踵を返そうとした、その肩先へ、「千枝ちゃん……。千枝ちゃんじゃないのか。」
「あら！」

ふり返って、彼女は最初に、煉瓦色の上衣を見た。それか

ら、黄色いシャツを見た。派手な色合いだった。ネクタイはなしで、男の両方の手は、それぞれズボンのポケットの中にあった。

「やっぱり、そうだ。」

「どなた……？」

頭をかしげるすぐあとから、

「あら、舵さん……？」

「そうだ、俺だよ。」

不意に、肩が触れ合うほどに近づいて来て、

「越して来たって、聞いていたが……。いい、奥さんになっちゃったじゃねえか。」

千枝は微かに、あとすざりした。笑うと、男の顔に昔の面影が覗いたが、頬はこけている、肩はとがっている、どんな生活が、この男をこんなにしたのだろうかと、千枝は心がひるむようだ。しかし、ひるむ気持の内側からは、ふとなつかしいものも突き上げている。

「あなたは、どうしてらしって？ この頃はこっちゃやないんでしょ？」

「ああ、あちらこちら……。今日は親父のところへ少々無理を言いに来たが……。」

「いやねえ、不良みたいなことを……。」

河岸で働く人の息子だったが、生活が乱れているとは聞

いていた。子供の時から、不良染みていた舵亮介である。尤も、その不良染みた少年の度胸のよさで、随分かばってもらったこともあったが。――

「晴海にいますって？」

「ええ。」

「送ってやろうか。」

「いいの？」

幼馴染の、気易さが出た。

「子供をなくしたんだって？」

「よく知ってるわね。」

「それで、生れた土地が恋しくなったのか？」

「ところが、来て見て幻滅……。」

「なぜ？」

「月島に、コンクリートのビルは似合わないもの。」

「でも、その格好なら……。」

「あら、いやだ。」

白のブラウスに、ねずみ色のスカート。網のように編んだ袋を下げていた。スカートは、承知で長目に作ったから、いくらか野暮ったい。くると埋立地の方にふり向きながら、

「やだわ……。」

「いや」の「い」がとんで、昔の言葉にかえっていた。そ

れだけ親しさが、戻って来たのかもしれない。肩をならべて、十字路を渡った。

「でも、あなたに会ったら久しぶりで、月島の気分がして来たわ。」

「ふん。」

「だって……黎明橋を渡るでしょ？ あれが昔の埋立地？」

「どこでも変わったなあ……。」

「東雲の方へ抜ける大通りね、あすこ、ひとところ、自動車強盗がはやったのよ。」

「そりゃ、道は広いし、空地は多いし、ちょっとやそつと声をあげても、誰にもきこえはしないから……。」

「あら、昔は、家もなかったわ。草ぼうぼうだったでしょ？ そんな寂しいところでも……。」

「そりゃ、その時は、誰もあんな所へ寄りつかなかったもの。」

誰も寄りつかなければ、襲われる人もなかったはずだ。

晴海が急に変わったのは、ここ数年のことだろうか。

七、八年前までの埋立地は、一面の草原だった。月島八丁目から海に向って歩くと、黎明橋も狭い木の橋で、そこから岸壁まで、まっすぐに一本の道が走っていた。その道

にも、夏ごとに青草は生い茂った。

車も、ほとんど通らない。道から一步はずれたら、子供など雑草に埋ってしまつて、方向も分らなくなつてしまう。一メートルを越える背の高い雑草の上には、少しどんよりとした重い空が、いつも拡がっていたものだ。

遠くに、工場の煙突は見えた。クレインのびびきが、きこえることもあつた。が、風が渡ると草原は、波のさわぐように遠くはるかに鳴り渡つた。葉ずれの音の中には、小鳥の啼き声もまじっていた。

どこかに、崩れかけた小屋のあつた記憶はある。しかし、家らしい家はなかった。湿気が強くて、家は建たないと聞いたものだ。

けれども、千枝が月島をはなれていた間に、埋立地はすっかり面変わりしていた。港は立派になつたし、丸いドームを持つ貿易センターも出来た。国際見本市も自動車ショウも、ここで開かれる。そして公団の住宅群は、明るい陽の中に並んでいた。

——これが晴海？

千枝はそう思うと、どうしても落ちつけなかった。

二年前に、子供を失くして、それまでの家に住んでいるのが、辛かった。夫も同じ思いだったのだろうか。

「引越そうか？」

「ええ。」

「どっちの方がいい？」

と聞かれて、迷いもなく、

「月島……。」

と、答えた千枝だ。

生れた土地だから、月島がいいと言うのではない。古い家の残っているその町の一劃が、目にうかぶと無性に恋しかった。川や掘割の多いのも好きだった。本願寺を左に見て、魚臭い町をぬけることを考えただけで、胸が鳴るようだった。

櫛見がどう立ちまわったのか、やがて月島に家がきまつたと聞いて、

「うれしい……。」

と言った千枝だったが、いよいよ越すことになって気がつく、晴海の公団住宅だった。規格型の住宅群が、十何棟とならんでいる。千枝の考えた、下町の「家」ではなかった。

「そんなところは……。」

と、言いたかったが、言えば我儘がすぎるだろう。

川にはなるほど、普通りに荷足舟がういていた。海は油ぎって、黒光りがしていた。墨汁のような水である。

「きたない海だな、これが海か？」

と、櫛見は言った。

「これが海よ。」

と、千枝は答えた。

「僕の家の方の海は、これに比べたら、なんとまあきれいなことだろう。」

しかし、瀬戸内海や和歌山の海など、千枝には少し美しすぎる。硝子細工の、海と思えた。汚れて濁んで、黒く重い海を見て育った千枝は、晴海の埠頭に立って安心するのである。それにしても、鉄筋コンクリート、五階建ての住宅群の中の一戸では、どうにも「彼女の家」にはならない。借りて来たセットのようである。いや、埋立地全体がモダンで明るくて、昼間はオートバイが風を切って走る、夜は若い夫婦が、肩をならべて歩く、思いがけない晴海になっていた。

「なんだかみんな、変っちゃったわ。」

黎明橋にかかりながら、呟くように千枝は言った。

「でも、この水のおいしさは変らないわね。」

「きたない水さ。」

「あら、蛇さんもそう言うの？うちの人もそう言ったわ。」ゆるい勾配を描く橋の欄干に沿って、右に三つ、左に四つ、高い灯がついている。

「ね、ごらんないよ。この橋も蹴なの……。」

「何が……?」

「あかりの数がよ。でもね、あかりが壊れたわけじゃないのよ。右の三つは橋の両端と中央にあるでしょ? それで左の四つは、橋の両端と、ちょうど三分の一ずつのところに二本……。凝って作っているんでしょね。でも、毎日ここを渡って帰ると、体がふっと傾きそうになるの、暗い方へ……。」

「いやに気が弱いね。」

「そうかしら?」

橋の長さは、何十メートルあるだろうか。暗い水に、黒い影をおとして、何十ぱいという船が浮いている。舟には火がないから、影と影とは重なり合って、水をいっそう暗くしていた。マストが何本か、夜空を縦に切っている。

「余り、幸福じゃないな、千枝ちゃん……。」

「え?」

と言った。不意打ちだった。そんな言葉がこの男の口から出るのだろうか、千枝は思わず舵を見た。男はまだ、暗い水面を見ていた。千枝が目を注いでも、見返ろうともしない。

「なんで、またそんな……?」

「御亭主は、なにをやっているんだ。」

「お勤めよ。」

「そりゃ、そうだろうが……。千枝ちゃんも、働いているのか。」

「うん。」

働かなければ、困るというわけではない。が、子供に死なれると、物忘れしたように手持ぶさただった。色抜きをしてさらしてしまった布地のように、一日一日がたよりなかった。そのたよりなさから逃れる積りで、千枝は仕事を待つことにした。

「うちの人、旅行が多いのよ。一人で留守番しているの、退屈なもの。」

「どんな仕事? あんたは……。」

「洋服屋……と言っても、男物の仕立よ。その背広……。」と、相手の襟に手をやって見て、

「このくらいなら、あたしにも縫える。」

「へえ。」

「あたし、月島から、越して行っただでしょ。親戚の家へ……。その家が、洋服屋だったの。だから十二の時から、男物の服をいじって育ったの。」

父に死なれ、母に死なれて、親戚に引き取られて行った時、彼女は十二で、妹の田鶴が七つだった。中学に入ったらばかりから、仕事を手伝わせられた。

「仕事が出来るといになれば、損はないよ。」

と叔父は言ったが、何年かするうちに、いっぱし役に立

つようになつていた。いつも三人か四人いた職人の中に、一人だけ女の子がまじつたから、千枝は周囲から可愛がられた。そういう意味では、幸福だった。もし、櫛見章吉が現れなかったら、いまごろは職人のもとに嫁いで、あるいは小さな店の、おかみさんになつていたかもしれない。

「へえ、大したものだな。洋裁をやる女は多いけど、男物を仕立てられる女つてのは、滅多にないだろうな。」

人がまばらに橋を上つて来て、順々に晴海へ降りてゆく。彼らの行く手には、広い道がまっすぐにのびて、その左手には住宅の群が見える。窓々には、みかん色の灯があつた。けれども土地が低いのか、辺りが広いのか、建物はそんなに高くは見えない。空地は多い。そして、空はいつそう広い。

「あら、月があるわ。」

赤い、大きな月であつた。十日ぐらいの月だろうか。ちようど埠頭の上あたりに、それはぼんやりとかかつていた。

「千枝ちゃんも、苦労したんだな。」

「そりゃ、親なし子ですもの、あたし……。あんたのように、無理言つてくことないわ。」

その夜、櫛見は帰らなかった。

次の夜も、帰らない。

「義兄さん、おそいわね。何かまた用事が出来て……？」
同居している妹の田鶴がそう言うのへ、

「分らないのよ、あの人つて、いつでもそうでしょう？
こちらもそれほど待つてゐるわけじゃないから、構わないけれどさ。」

「本当？ 姉さん……。」

田鶴は、大きな微笑をふくんで、

「ある時は本当のような、でもある時は、嘘のような……。」

「あら、ひやかしても、ひやかし甲斐はないわよ。」

「あたしなら、そんな旦那さん、首っ玉をつかまえてゆすぶっちゃう……。」

「あなたなら、そうね。でもあたしは駄目。はなれてゐる、じつと見ている。」

「じつと見ていれば、分るの？」

「さあ……。」

千枝にも分るとは言えない。

おとなしくて、仕事には情熱的で、その点ではいい夫にちがひなかった。が、夫を肯定することは、自分が振り出されていることを、承認することにもなるだろうか。

馴れているから、感じ方は薄くなっているかもしれない。結婚してから六年、半月やひと月ずつ家をあけられたことは、何十回になるか知れない。はじめはそれを、夫の仕事のためだと思った。黙って待つことが、自分のつとめだとも思った。が、子供が生れて、その子が死んで、——すると同じ一つの現象が、千枝にはいくらかちがっても見えて来た。夫を見る目が、肥えたのであろうか。夫には、自分が食い足りないのではないかというおそれが、夕方の潮のように肌をひたしはじめののだった。

朝、妹の田鶴は自分で弁当をつめて、先に出掛ける習慣である。新宿のつとめ先までは、時間がかかった。東京駅までバスに乗って、そこから中央線の急行に乗りかえる。それにくらべると、千枝の通う勤め先は近かった。京橋の中通り、ブリジストン・ビルの裏に当る風村洋服店だ。小さいけれども、名の通った店である。

特別急ぎの仕事でもない限り、勤めは朝の九時から夕方六時まで。夜になれば、もう表戸をしめてしまふ。六十近い腕のいい主人と、職人が三人、いや、千枝をいれれば四人になる。四人が店の二階で、一日じゅう針を持ち、ミシンに向い、いくらか英国風の、形のいいスタイルが自慢の店である。格式も、高いかもしれない。従って、顧客も選ばれる。仕立代は安くはなかったが、それだけ千枝の収

入も、多くなろうというものである。

その日、千枝はまた、何日ぶりで帰りがおくれた。

朝、店に出ると、主人の風村が、

「櫛見さん、仲田さんの夏服はどうなっている？」

いつも千枝を名指しで、仕立させる客の注文である。牛込にある共立印刷の部長だった。四十代のなかばだろう。か。時々、思い出したように店に立ち寄って、一着ずつあつらえて帰る。

「いまやりかけてあるのですが、急ぎのものが間に入りましたから……。」

「それは、いつ上る？」

「お昼ごろ……。」

「じゃ、それからすぐ掛かれる？」

「ええ。」

忙しい日になった。午後になってはじめた仕事は、終ると夜の九時をまわった。

「御苦労だが、届けてくれるか？」

「はい。」

千枝はその時、なぜかちらと、夫の章吉の顔を目にうかべたものだ。

——こんな晩、あの人は帰って来ているのじゃないかしら？

しかし、遅くなりついでだった。それに、この家の主人には、随分、世話にもなっている。

「車代は出すから、じゃ、届けてあげて……。」

外に出ると、中通りはもう暗かった。街燈は少ないし、大体、この時間まで開いている店は、一つもない。曇っていると見えて、足もとまで暗いようである。通りまで出なければ、車は一台も来そうもなかった。

千枝はハンドバッグを腕に下げ、大きな洋服箱を抱いて、小路を抜けた。電車通りで、タクシーを拾った。

——今日はおそくなるわ。

と、思った。疲れているから、心も重いようである。

青山まで、二十分以上かかっただろうか。

車を降りると、石の門が不意に明るい。いや、門はやっぱり、闇に沈んでいるのだが、——その石の柱から、邸内につづく高い袖垣に、白いばらが咲きくずれていた。何気なく立てた外燈の灯が、ばらの白を一部分だけするどく浮き上がらせ、それにつづく部分を、静かに闇に溶かしている。

花の匂いが、いきなり千枝をつつんで来た。ふと足もとが危くなりそうな、錯覚である。疲れが甘く、重くなった。玄関でベルを押すと、すぐ応接間に通された。茶が運ばれた。しかし彼女はまだ、ばらに酔っていた。

——あんな見事なばら、見たことがないわ。

目の前に、白い花が、まだ影のように重り合っていた。だから、目に残るその花の中に現れた人へ、彼女はいきなり、

「見事なばらですこと……。」

と言うのだった。相手が笑って、

「気に入りましたか？ 帰りに剪ってあげましょう。」

「もったいないですわ。」

「とてもない。あなたの作る服ほどには、エレガントではない……。」

「あら！」

と、紅らむようである。千枝の作る服よりは、と相手は言ったが、あるいは千枝その人よりも、とても言いかねない微笑である。

「失礼いたしました。ばらに夢中になって、用事をあともわしにしてしまったような……。」

「いや。」

仲田義治は、別室で千枝の作って行った服を着て見せた。肩にも、ウェストにも、狂いはなかった。

「うまい。あなたは珍しい人だ、女だというのに……。」

この人の服は作りなれていたので、千枝は一応、安心していられたが、

「一度、御馳走しようかな。まあ、これは心持だけ……。」

角封筒に、紙幣が入っているようだった。チップの積りであろう。それを受取ってばらの門を出ると、疲れが抜け落ちているようだった。

ばらを抱えていた。

車はすぐに来た。ドアが開いたから、ためらわずに乗った。仕事の巧く行った、喜びはあった。お礼をもらった、楽しさもある。胸のふくらむような思いで、クッションに身をよせて、千枝はそのまま、じっと目をつぶった。

車が、築地から月島に出て、黎明橋にかかると気づいて、「その団地の、向うの通りで……。」

気持は、ゆたかになっていた。いくらか眠いようでもある。運転手は口を開かなかったが、気にもしなかった。広い十字路を左に折れる。道はしらじらと広いが、街燈は少ない。背の高い街路樹が、風にさわぐようだと気づきながら、

「ありがとう。おいくら……?」

「……。」

「この辺でいいのよ。」

「五千円!」

と、男は低い声で言った。はじめて、その背に目を向け

た。暗くてよく分らないが、若い男のようである。カッタの上で、首は固定したように微動もしない。

——ああ、これは白ナンバーだった。

と、はじめて気がついた。

すると、寒気がした。

——危い!

と思うと、急に血が凍るようである。胸ばかりが、荒立った。

「おいくらですって?」

普通ならば、五百円もかからないだろう。

「五千円。」

「そんな……。とにかく、止めてちょうだい。」

「出さなければ、停めない。」

なるほど、車はいくらか徐行しているが、団地の建物は、次第に後へすぎてゆく。一体、どういうことになるのか。ばらと一緒に、ハンドバッグを抱こうとすると、ふり返った男の左手がいきなり伸びて、

「言うことを聞かないと、怪我をするぜ。」

無造作に、それをひつつかんでいた。

「怪我をしたいのか。車をぶつつけるぞ。」

千枝はやっぱり、手をはなした。と、たちまち左の扉が開いた。

「降りろ！」

「とめてくれなければ……。」

「とび降りるんだ、なんだ、このくらい。」

なるほど、スピードは充分、落ちてゐるらしい。言われる通りにするより仕方がない、と、——いや、そこまで考えたかどうか怪しい、——命じられるままに、そつと半身を車から覗かせた。

——死にはすまい。

飛ぼうとした瞬間、背中をつきとばされた。

「あッ！」

と転げ落ちると、車がスピードを出すのが一緒だった。

ドアで、肩口を打つのは意識した。それから路面で、腰と、足首と。——白いナンバー・プレートは見たが、番号は見えなかった。車は猛烈な速度で、晴海橋の方へ小さくなって行く。

——怪我をしたかしら？

と、千枝は最初に思った。掌が、コンクリートの路面をなでたが、立ち上る力はなかった。却つて、体ごと沈んでゆくようである。目の前が一瞬、黒い海になった。晴海の海である。子供のころに親しんだ海である。しかしそれは、今の彼女にとって、なつかしい海であつたろうか、そ

れとも屈辱の海であつたのだろうか。

痛みはまだ来なかった。急に、はげしい光の中にさらされると思うと、ブレイキの音が夜気を割いた。車のドアの、開く音がする。あわただしい靴音が入り乱れてひびいた。

「どうした、どうした……。」

という声と共に、いきなり肩口をつかまれた。ゆすぶられた。

「痛い……。」

と、漸く声が出たろうか。目を開くと、空は曇っているのだらうか、雲の切れ目があるらしく、赤い星が一つだけ、画紙がひょうのように止つていた。またたくとも、見えない。

「おう、手をかせ……。」

耳もとで、あわただしく男の声が言う。

「はねられたのか？」

「そうらしい……。」

抱き起して、車に運ぼうとするらしいから、千枝は首をふつた。

「なに……?」

「うち、そこなんです。」

「どこ……?」

口をきくのは、辛かった。顔だけそちらに向けて、明る

窓の建物を指した。

「歩けますか？」

両方から支えられて、歩き出すと、

「何か、荷物はない？」

「盗られたんです。」

「え？ 自動車強盗か……。」

千枝はだまっていたまま、かすかに肯いた。

漸くドアの前に立つと、男が、ベルを押してくれる。玄
関に灯がついて、

「おそいじゃないの、姉さん……。」

ドアが開いて、

「ああ……。」

と、田鶴は蒼ざめた。

「どうしたの、姉さん……。」

「自動車強盗に会ったらしいんです。いま、その裏の広い
通りに、倒れていらした。」

「義兄さん……。」

「おう。」

——ああ、やっぱり帰っていた……。

千枝は頭の片隅で、悪い日に、——と思ったが、櫛見は、
「これはどうも……。」

連れて来てくれた男たちに礼を言うと、すぐに鋭く冷い

目が千枝へ来た。

ふ、と、千枝は笑おうとした。

折角、お帰りになった日に、と言おうとした。が、その
時になって、不意に恐怖がこみ上げて来た。胸をふるわす
ようである。

妹に助けられて部屋に入ると、突然、涙があふれた。声
ももう、おさえられない。畳に突っ伏すと、胸の辺りに火
のような痛みが走った。その痛みの中で溺れるように、千
枝は声をあげて泣きはじめた。

送ってくれた男たちの、帰ってゆくのも知らなかった。

「おい、何をとられた？」

「ハンドバッグを……。」

「それから……？」

「それだけ……。」

それで櫛見が黙ったのは、おどろきのためだろうか。話
が分ったからであろうか。それとも、なにか、疑いが残っ
たのであろうか。言葉の切れたのが、千枝には不意に不気
味だった。

急いで体を起すと、千枝のスカートは、泥まみれだった。
白いブラウスは、胸の辺りで破れていた。そこから、ばら
の花びらが一枚、静かに白くこぼれ落ちた。

あらゆる結婚というものは、必ずそれ自身、手傷を負っているものである。稀に、傷のない夫婦関係があったとすれば、それはすでに、最も傷つき易い状態に置かれているというほかはない。――

櫛見千枝は、三日間、店を休んでいた。

無理をして出れば、出られない状態ではなかった。が、道路に投げ出された時に、打ちつけた個所が痛んでいた。腰骨の辺りには、うすいあざさ残った。いや、そういう肉体的な故障より以上に、神経が参ってしまった。――
不当な扱いをうけた、という印象が、体の芯まで沁み込んでいる。

失った金は、仲田義治から受けとったチップを加えても、数千円にすぎない。すぎない、という言い方は誤解を招くだろうか。彼女は決して、経済的に富裕な女ではなかった。

裁縫師としては、立派に一人前の腕前を持ってはいたが、男物のズボンを縫いあげるには一日かかる。工賃は七

百円である。上衣には、丸二日かかる。そして、千五百円の報酬をうけとる。それで、一カ月の収入は、一万五千元がせいぜいだった。夫の収入にそれを加えれば、生活に困ることはなかったが、失った金が惜しくないことはない。しかも、それを惜しがっている時間がないほど、彼女は奇妙な憂鬱の底にとじこめられていた。

仕事を休みはしたが、寝ているほどのことはなかった。朝は、いつも通りに起きて、朝飯の仕度をした。それから、妹と夫とを、それぞれの勤め先に送り出した。

一日じゅう家にいて見ると、雑用はたまっているようだった。けれども、それにも手を下す気はなかった。一人になると、ヴェランダのデッキ・チェアにもたれた。そして、ぼんやりと空の一角をながめている。空を見ながら、黒い海を目に描いている。そういう海を思うに都合がいいように、空は曇りがちだった。汚れた雨が、降りそうな気さえた。昼飯は食べなかった。夜食も、――夫と妹とが帰ってくるのでなければ、――仕度しようとはしなかったかもしれない。

強盗に会ったことなど、忘れてしまえばいいのである。金は、働けばまた出来る、と思う。が、彼女には、何かが跡を残きそうなおそれが残っていた。漠然と、まるで梅雨どきの雲のように、それは彼女を押しつぶしていた。